



ジャン・バニエの手紙

2012年1月、トロリーにて

親愛なる友人の皆様

ついにやりました。ルイ・マリラック通り 31 番地からオリーンズ通り 19 番地へのお引越しが完了しました。家具や本や書類、ベッド、歯ブラシ（磨く歯も、あまり残っていないのですが）、そして私自身の引越しです。いまだにリトリートをしている「農場の家」の近くの、新しい居住環境に私は落ち着きました。とてもいいところですよ。私の事務室には、ラルシュの聖堂や小さな鳥小屋（巣箱）のある庭



を見下ろす、大きな出窓があります。鳥たちがやって来て、えさの種をついばみ、仲間同士で喧嘩したり、じゃれあったりするものと、私は期待しています。今はまだ、この鳥小屋は空っぽです。あまり警戒しなくなると、コマドリやシジュウカラ、スズメ、ハト、そして他の、すべての種類の、鳥の色を、私はじっくり観察することになるでしょう。鳥たちがやって来るまで、待ちきれません。でもたぶん、彼らがやって来ると私は、読書もせず、他のものにも手がつかなくなってしまうことでしょう。鳥たちはとてもきれいです。とても明るく、楽しく生きています。時には少々騒がしく。鳥たちは神の栄光を歌い、喜びで笑います。生き物はなんとすばらしいのでしょうか。喜びと無限の神の創造をあらわしています。鳥のことば

を理解し、そして鳥たちを魅了する賜物を持っていたと言われるアッシジの聖フランシスコのことが、私には分かります。悲しいかな、私はそのような賜物を持ち合わせていません。鳥たちは私に惹かれているのではなく、私がやっている餌の種に惹かれているのです。

今年のクリスマスに、私は、ベツレヘムでの新しい降誕を前にして喜ぶ鳥たちの喜びに包まれることでしょう。かいば桶の周りでさえずる鳥たち、牛やロバ、小羊やおそらく山羊のそばに寄り添う鳥たち。

新しい誕生。そうです、私にとりまして、まさしく新しい誕生なのです。隅から隅まで知っている小さな家で、私は36年間、過ごしました。今では、思い出や静かな出会いがいっぱい詰まっています。苦しみや不安の言葉と同じように、いろんな人によって語られた

真理の言葉や神の言葉に耳を傾けた時間が、いっぱい詰まっています。そして労働や創作時間を忘れず、笑いや喜びの時間がいっぱい詰まっています。そして特に、イエスとの出会いの、人生の、そして豊かな時間でした。また、どうしようもない堂々巡りの時もあったり、あるいはどうしていいのかわからない時、空虚な時、そして貧しい時もありました。

私たちには、新しい誕生が何をもたらすのか分かりません。かわいい赤ちゃんはお母さんの胎の中に、9ヶ月間います。そして、その後、喜びのサプライズがあります。かわいい赤ちゃんにとっては、なげきの時でもあります。なぜなら、彼らは（私の場合、36年間ですが）9ヶ月間という保護された人生を

過ごした訳です。ですから私にとって、それは驚きと喜びの時のことです。私が、すべてのことを、喜びをもって受け入れられるように、祈ってください。

お家を変えてみてはどうですかというアイデアを出してくださったジャン・クリストフとクリスティヌに私は深く感謝しています。このアイデアが実現するように、彼らが車輪を動かし始めました。またジャン・ラニエ、ジャン・クロード・マレ、さらに（デイブレイクを設立する以前の1966年、スティーブとアン・ニューロスによって設立された）前のラモーホームを購入し、とてもすてきなお家へと改装してくださった財団にも感謝申し上げます。

数ヶ月間、建物の一部はチャペルとして使われ、トマ神父が主日のごミサをささげていたところでした。そうです、あのラモーホームは、今や、とてもすてきな隠居の庵となり、私が、最初で最後の神との対面、そして神との心と心の触れ合いへと導いてくれた弱さの小道という、私の人生の、最終段階を生きる場所となったところでした。1980年にラルシュのコミュニティーリーダーとなって私について来てくれたオディールにも感謝しています。彼女は退職しても私のこと、私の健康のこと、その他のすべてを見守ることを引き受けてくださいました。この家は二世帯住宅に改装されて、ひとつはオディール用、そしてもうひとつは私のためのものとなりました。私は時々、ここで食事をしますが、兄弟姉妹と食事を分かち合うために「谷間の家」にも通い続けています。彼らのうちの幾人かは、40年を越す旧知の仲間です。



クリスマスとともに始まった、私たちを恐れと自己中心から救うために来られた救い主であるイエスのご降誕をお祝いする、この新しいステージを前にして私は恥じ入っています。私の頭や魂や心の中には、生まれ変わりたいという真の思い、神のうちに憩いたいという真の思いがあります。1943年、アウシュビッツで殺された若いユダヤ人女性、エッティ・ヒルサムの記事がどれほど私の心に触れ、心を動かしたことか、皆さんご存知ですよ。

彼女は最悪の恐怖の中で生きていました。彼女は、ユダヤ人の血をひく他のすべての人々とともに、ヒットラーや彼の熱烈な支持者たちによって死刑に処せられることが分かっていました。「神よ、私はこの世を直視いたします。現実から逃避せず、美しい夢に逃げたりしません。そして、どんなことがあろうとも、私はあなたの造られたものを、断固として賛美いたします」と彼女は書いています。もう少し先に進めましょう。「命」を「神」と置き換えてみるといいかもしれません。

「私が、自分を防護するのをやめると、何の前ぶれもなく突然に、私は「命」の裸の胸と、非常に優しく、そして守るように私をしっかり抱んでくれる腕の中で憩っている私がいるのです。そしてその心臓の鼓動、一うまく説明できないのですが—それはゆったりとしていて、とても規則正しく、非常に柔和、ほぼ窒息しそうなのですが、とても信仰的で、決して止むことのない十分な強さがあり、しかも同時に、とても善良で慈悲深いものです」。

私たちの世界は、崖っ縁にいるようです。何百万人もの人たちが飢えに苦しんでいます。他にも、恐怖のとりこや戦争の犠牲者、収容所にいる難民、マフィアに搾取されている人たち、冤罪で刑務所に入れられている人たちがいます。私たちは、これらすべてのことを知っています。メディアもこれらのこと

については発信しますが、発信を止めてしまうと、その沈黙が彼らの叫びを忘れ去ってしまうように仕向けるのです。まるでそういった人たちが、まったく存在していないかのように。また、この世界では、重大な金融危機が進行中であり、皆がそのことについて話しますが、困っている人たちのおかれている現実が私たちの心に、本当に触れたことがあるのでしょうか。それでも人生は、まるで何もまずいことがなかったかのように続いていくようです。

ある日、私たちは恐れという騒々しい叫びを覆い隠すように、ベルが鳴り、クリスマスキャロルの歌を聴くことでしょう。「地上に平和、平和あれ」と。クリスマスは、暗闇から小さな光が出るという、毎日の出来事です。そうです、平和は私たちの手の中に、私の手の中にあります。私は、自分とは異なる他者に、その人たちのすばらしさを伝えるという優しさと愛の小さな行ないをすることができます。ラルシュでは、「信仰と光」も同様に、私たちは大義のために戦う闘士ではなく、むしろ希望の証し人です。エステルはダウン症だといわれますが、私たちは彼女のニコニコした、かわいい目を知っています。ある人たちは、エステルが生まれる前に中絶して欲しかったとっていました。他にも、ある人たちは、彼女のダウン症を癒して欲しいとんでいます。しかし彼女には、光り輝くような目があり、神の存在をあらわしています。この世は、無茶苦茶になっています。非常に優しく、謙遜で、慈しみ深い、平和の神は、私たちの上にある星の中や、あるいは知性あふれるスピーチの、すばらしいアイデアの中に隠れておられるのではありません。むしろ、エステルの顔の中に、子どもの顔の中に隠れておられます。これは、癒しがどうか、こういった子どもたちを選別して中絶するかどうかといった問題ではなく、子どもたちがどのような傷つきやすさや難しさを抱えていようと、すべての人が社会の中で、自分の居場所を見つけることができる場を造ることなのです。エステルの癒しという問題は、私たちの社会に存在する恐れや拒絶に対する癒しの、姿勢の問題のような、それほど大きな問題ではありません。それは、すべての人が成長でき、才能を伸ばすことができ、自己に対する自信を見出し、そして自身の人生の深い意味を発見することができる、受け入れの共同体を造るかどうかの問題です。

イエスは、ひとりの子どもを腕に抱き、愛の王国である神の国に入るためには、小さな子どものようになるようにと、弟子たちに求めておられます。子どもたちの賜物である、この優しさ、驚きの目、心開くこと、信頼そして愛を受け入れることを見習いましょう。イエスは、加えて言われます。「わたしの名においてひとりの子どもを受け入れる人たちは、わたしを受け入れている」のだと。エステルを受け入れることは、イエスを受け入れることなのです。この平和の神は、もっとも小さな人たち、もっとも傷ついた人たちの中に隠れておられます。天国へと上る努力をせず、下へ降りるようにしましょう。そうです、エステルや拒絶にあった人々に出会うために、下へ降りて行きましょう。それは彼らと、心と心で、人と人で、とても柔らかな交わりの時の中で、ほほ笑みをもって出会うということなのです。彼らを変えるためではなく、私たちの心の中に、彼らを受け入れるように。

さて、ラザロの家と名付けられた私の、新しい隠居庵の話に戻りましょう。ラザロとは、ヨハネが福音書の中で(11章)言っている、ベタニアのマルタとマリアの兄弟でした。彼の姉妹は、イエスに使いを送るときラザロのことを「あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言っています。「あなたの愛しておられる者」というのがラザロの呼び名です。4番目の福音書を書いたヨハネもまた、自分のことを「イエスの愛した弟子」と呼んでいます。ラザロのアイデンティティーは、ヨハネのアイデンティティーと同じように、「イエスの友人」であり、「イエスに愛されている」ことなのです。「神に愛されること」、これって私たち全員のアイデンティティーではないでしょうか。これこそが私たちの人生の意味であり、人生の完結の意義です。現在、私は豊かさの中で、このことをいつか体験するであろうと



信じています。ラザロの家でクリスマスを過ごすことは、私にとって、新しい段階です。それは私の人生の、最終章の始まりです。私は、エッティとともに、神の胸の中で憩うこと、そして神の心臓の鼓動を聴くことを学ぶつもりです。

私の、ヨハネ福音書のリトリートに来られたことのある方は、ラザロには重度の障がいがある、イエスはしばしばやって来て、ラザロのそばでくつろいでおられたのかもしれないという私の見方のことをご存知でしょう。ラザロの家は、弱くなっていくのに、ぴったりの場所です。クリスマスは、南半球におられる人たちにとっては、真夏の、灼熱の太陽の下でしょうけども、私たちにとっては、とても静かで、穏やかな時です。今、フランスでは雨が降っています。天候はおだやかで、太陽の光が射すのは、至極稀です。世界は困難な中を進んでいます。

そんな中でも、すばらしい平和のデモが見られます。すてきな人々 — すべてのいろんな宗教の、あるいは宗教をもたない、右の人、左の人、上の人、下の人 — が平和や愛をあらわす方法、そして異なる人々を受け入れる方法を探し求めています。彼らは、微笑みかけます。そして、それらのほほ笑みは、時に、カオスから出て来ます。平和のお告げは、私たちの心の中にあります。

ラルシュや「信仰と光」にある、すばらしいつながりのネットワークの中で、お互いに交わりあいましょう。ここで私たちは、抑圧されたり、疎外されたり、あるいは困っている人々との結び付きによって癒されます。これは世界中に広がるネットワークです。修道院にもキリスト信者やヒンズー教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒の中心や、神殿やモスク、教会、チャペルそしてユダヤ教の会堂（集会所）、そして特にこれといった信仰を持ってはいないけれども、人間を信じている人々の中に広がるネットワークです。これは、すごいネットワークで、ひとり一人、その人の持てる力によって、平和のために働いたり、平和の道具になったりするネットワークです。私は、イゼルディン・アブエライシャの「私は僧むまい」という本が気に入っています。この男性は、ガザで、3人の子どもを、イスラエル兵に殺されて、失いました。他者をすべて拒否することから、愛や平和の可能性を秘めた人々を「他者」という人々たちの中に見るように、変わらしましょう。

私のために祈ってください。私が愛することを学ぶことができるように。エッティのジャーナルにあった最後の言葉です。「私は、非常に多くの人々の傷に塗られるバルサム（香膏鎮痛薬のひとつ）になりたい」。

皆さまからのカードやお手紙をいただき、感謝いたします。皆さまにすべてを感謝。

新年にあたり、私たちひとり一人、そして地上のすべての人を神が祝福してくださいませうように。

愛をこめて

ジャン・バニエ

追伸:「信仰と光」のお話について、マリーエレン・マチュー女史が書いた、すばらしい新刊本「*Plus jamais seuls* (もうひとりぼっちではありませんよ)」を、たぶん、まだ読まれていないのではないのでしょうか。昨年10月にフランス語で出版されましたが、続いて翻訳本も出版されると思います。